

## 永峯秀樹纂訳『経済小学 家政要旨 後編』の原典解明

谷 口 彩 子

(熊本大学教育学部)

原稿受付平成 10 年 7 月 1 日；原稿受理平成 10 年 10 月 29 日

Clarification of the Original Texts of Nagamine Hideki Edited and Translated  
“*Keizaishogaku Kaseiyoshi Kohen* (the Latter Part)”

Ayako TANIGUCHI

Faculty of Education, Kumamoto University, Kumamoto, 860-8555

“*Keizaishogaku Kaseiyoshi*” is the translated book on home management which was read most widely in the early Meiji Era. The purpose of this paper is to clarify the original texts of Nagamine Hideki edited and translated, “*Keizaishogaku Kaseiyoshi Kohen* (the latter part),” and to compare the translation with the original texts so as to interpret how the contents of the original books were accepted in Japan in early Meiji Era.

The results are as follows:

The original texts of “*Keizaishogaku Kaseiyoshi Kohen*” are Andrew Combe: *The Management of Infancy*, D. Appleton and Co., New York (1875), and Thomas Bull: *Hints to Mothers*, Longmans, Green, and, Co., London (1876). The original authors are both English physicians, and the original texts are written in order to offer the medical knowledge on pregnancy, delivery and rearing infancy to the mothers. The characteristic of the original texts is to try to apply the hygiene and physiology to the family life.

Nagamine Hideki chose the two books, translated the parts related to the woman's lifecourse into “*Keizaishogaku Kaseiyoshi Kohen*.” This is why the title page of the translation says “Nagamine Hideki San-yaku (edited and translated).”

(Received July 1, 1998; Accepted in revised form October 29, 1998)

**Keywords:** a translated book on home management 翻訳家政書, early Meiji Era 明治初期, developmental history of home economics 家政学成立史, Nagamine Hideki San-yaku “*Keizaishogaku Kaseiyoshi Kohen* (the latter part)” 永峯秀樹『経済小学 家政要旨 後編』, Combe “*The Management of Infancy*” コム『子女教養論』, Bull “*Hints to Mothers*” .ブル『母親の心得』.

## 1. 緒 言

明治初期における翻訳家政書は、近代国家への歩みを始めたわが国歴史上の転換期という社会背景のもとで、それまでの家事教育に対して啓蒙的な役割を果たすとともに、その後の家政教育・家政学研究に多大の影響を及ぼした出発点と考えられてきた。またこうした翻訳家政書の理念や内容がどのように受容されてきたのかという経時的推移については、家政学に関する史的考察の上から意味深く受けとめられている<sup>1)2)</sup>。また、家庭科教育史(学校教育)の立場に立った研究として、二宮と武井<sup>3)</sup>によるものなどをあげることができる。

筆者はこれまでに、明治初期における欧米家政理念・

家政思想の受容過程を明らかにするために、翻訳家政書研究を進めてきた。わが国において明治初期における欧米家政理念や内容の受容過程を解明するためには、まずその原書と訳書との比較研究が必要となる。しかし、明治初期の翻訳家政書の原典については解明されていないものがほとんどである。これまでに、原典解明さらに原書と訳書との比較が行われている翻訳家政書研究として、常見<sup>4)5)</sup>および石川<sup>6)</sup>、亀高と犬尾<sup>7)</sup>、谷口<sup>8)9)</sup>によるものがあげられる。とりわけ筆者は明治初期における翻訳家政書の中でも最も広く、小学校や女学校の教科書としても採用され、啓蒙的な役割を果たしたものとして特に著名な『経済小学 家政要旨 前編』(以下『家政要旨 前編』と略す)の原典解明

とその原書の特質に関する研究を進めてきた<sup>10)~13)</sup>。しかしその後編にあたる『経済小学 家政要旨 後編』(以下『家政要旨 後編』と略す)の原典については依然として解明されていない。

そこで本研究では、『家政要旨 後編』の原典解明と原典研究および原典と訳書との比較検討を通して、翻訳者永峯秀樹が原書のどのような家政理念や内容を採択して訳出し、日本に紹介しようとしたのかについて考察することを研究目的とする。

## 2. 研究の方法および資料

### (1) 『家政要旨 後編』の体裁

『家政要旨 後編』の体裁に関しては、すでに田中と田中により、印刷・製本時が異なる2種類8部の紹介がなされている<sup>14)15)</sup>。さらに筆者が平成元(1989)年7月から同9(1997)年10月にかけて、国立国会図書館、東書文庫、東京家政学院大学附属図書館、山梨県立図書館甲州文庫等で『家政要旨』の体裁に関する調査を行った結果、すでに紹介されてきたものとをあわせて、4種類9部の体裁が確認できた<sup>13)</sup>。こうした体裁の種類は、その前編には及ばないものの、他の翻訳家政書と比べると、印刷・発行回数が多かったことを示している。本稿ではそのうち最も刊行年が早かったと推定される『家政要旨 後編』大本(甲州文庫、国立国会図書館、東書文庫、東京家政学院大学附属図書館、初智艸堂所蔵)の体裁を紹介する。

半紙判、和紙本版刷和綴の上・下2冊本で、上巻54丁(序2丁、目録3丁、本文45丁、字引4丁)、下巻64丁(本文53丁、字引5丁、発兌書肆6丁)からなる。表紙は、藍色、厚和紙で、左肩に題箋があり、「経済小学 家政要旨 二編 永峰秀樹編輯 上」(「経済小学」は角書)と記されている。

表見返しは赤紙に黒で印刷されており、匡郭のなかに「永峯秀樹纂訳、経済小学 家政要旨 二編、甲府書肆 内藤氏蔵版」(「経済小学」は角書)とある。

上巻巻頭には、序2丁、目録3丁がある。そのあとに初智艸堂所蔵版では挿画があり、明治初期の女学校と思われる洋式建築物の前で、女性教師が12人の女生徒に洗濯の指導を行っている図が描かれている。

本文は罫入りで、1ページ、20字10行で印刷されている。各巻末には、文中の漢字の読み方や意味を記した「字引」が登載されている。

奥付には「明治十一年五月廿九日版權免許 同十二年七月出版 定価金五十銭 纂譯人 静岡県士族 永

峯秀樹 東京麹町区有楽町二丁目二番地 出版人 山梨県平民 内藤伝右衛門 甲府常盤町四番地 売弘 東京府 同支店 日本橋区通塩町十一番地」とある。

### (2) 『家政要旨』刊行の趣旨

『家政要旨 後編』の序は、『同 前編』の緒言が記されて3年後の明治12年7月付で、翻訳者永峯秀樹による翻訳・刊行の趣旨が記されている。

その冒頭では、家国の隆盛は自由・独立にあるが、自由・独立を果たすためには各人の経済的基盤が必要であること、一家の経済には、「夫ハ外ヲ務メ婦ハ内ヲ司ル」という二道があり、とくに妻の役割が重要であること、こうした観点から『家政要旨』が刊行されたことが述べられている。一国の経済と一家の経済との相互の関連性に着目し、その両者すなわち夫と妻それぞれの職務に優劣をつけることなく、むしろ妻の役割を重視する記述に特色がある。さらに続けて、『家政要旨 後編』発刊の意図が次のように記されている。

「婦ノ職タル特ニ茲ニ止ラス更ニ重大ノ者アリテ存セリ何ソヤ子女ヲシテ家國ニ有益ノ人物タラシムヘキ者是ナリ子孫ノ賢愚強弱ノ責ハ均シク父母ニ属シ偏輕偏重ナキカ如クナレトモ母ニ属スル所却ツテ重シ母ハ其子女ト相關スル所極メテ親密ナレハナリ即チ母体平生健全ニ懷妊中注意周到ニ分娩後養育良方ヲ得ルトキハ其生子ヲシテ愚弱ナラシメント欲スルトモ得ヘカラサラン子女ハ将来家國ノ盛衰ニ關係ヲ有スル者ナリ故ニ婦職ハ子女ニ關スル者ヲ以テ至重ト為ス世ノ婦人ニシテ皆其職ヲ果サン事ニ踴勉セハ家國ノ隆盛企ツテ待ツヘキナリ是レ後篇ノ編輯アル由縁ナリ前後二編ヲ合シテ婦道ノ要領既ニ尽クル」

女性の仕事は一家の経済を司るのみにとどまらず、さらに重大な職務として、子どもを家國に有益な人材に育てることにある、と述べる。両親の役割はともに重要であるが、子どもに及ぼす影響は母親の方が顕著であり、母親の普段の健康、妊娠、分娩の注意点、子どもの養育方法について記述がなされている。このように、衣食住の調え方、使用人の管理、病人や幼児の世話・看護などの女性の職務内容全般を記した『家政要旨 前編』と異なり、『家政要旨 後編』では子どもを生み育てる母親の職務内容を重視し、母親の職務こそ家族や家國の隆盛につながるとする意義を述べている点に本書の大きな特色がある。『家政要旨 前編』と『家政要旨 後編』をあわせて「婦道ノ要領」が網羅されると永峯は記している。

### (3) 『家政要旨 後編』の内容的特質

『家政要旨 後編』の内容は、家政のあらゆる領域が網羅された前編と異なり、女性の立場に立った夫の

## 永峯秀樹纂訳『経済小学 家政要旨 後編』の原典解明

選び方（配偶者選択の際の留意点）、子どもに対する親の遺伝的影響、妊娠の際の注意点、出産日の計算方法、出産の際の注意点、さらに育児方法などの保育領域を中心に、医学的知識に基づいて記述されている。

『家政要旨 後編』に述べられた夫の選び方として、①学問知識、不足ナク（学歴）、②子孫ノ教育入費等差支ナク（経済力）、③性質善良、親ミ易ク、放蕩ナラザル（性格）、④悪疾、遺伝病、懼ルベキ（健康）の4項目があげられている。また子どもに影響を及ぼす親の遺伝に関する記述には、「子女ノ虚弱ノ原因」として、其両親ノ心身虚弱ナル者、成年前ノ結婚、近親婚、婚姻ノ年齢、受胎時父母ノ身体ノ虚弱ナル者、懷妊時母親ノ強弱の六つの条件が述べられている。

本文冒頭の総論は、翻訳ではなく、翻訳者永峯秀樹が記した内容である。そこに記された「夫婦ハ愛ノ一字ニテ睦マシク暮スベキ者ユヘ、可成丈互ニ親切ヲ尽シ、別シテ病氣杯ノ時ニハ心ヲ用キテ介保スベシ」と、当時としては斬新な「愛」と助け合いによる夫婦関係の記述にも特色がある。さらに続けて、女子の一生は夫の善悪に左右されること、両親や親族が夫を選び、見合いで一度顔を合わせるのみでは、愛情が薄く、問題が多いと指摘する。西洋では婚約中でも互いをよく知るために往来が行われており、相手をよく知った後に結婚すれば、離婚も減るだろうと述べている。夫婦の愛情を前提にして結婚を考え、親や親族ではなく、女性が夫を選ぶ自由をもつという観点から夫の選び方が述べられている。

### 3. 結果および考察

#### (1) 『家政要旨 後編』の原典解明

##### 1) 『家政要旨 後編』の原典に関する記述

『家政要旨 後編』の原典解明にあたって、まず、その原典に関する手がかりとなる記述を探した。これまで原典に関する記述として、『家政要旨 後編』の「序」にみられる次の記述が知られてきた。

「此書ハ英人コスブル氏著母ノ心得及米人コム氏子女教養論ヨリ纂訳シ傍ラ愚意ヲ附記スル者ナリ」

ここではイギリス人コスブル著『母の心得』、アメリカ人コム著『子女教養論』の2冊を原典としたことはわかるが、その原語表記はみられない。「コム」の原語表記についてはComb(e)あるいはComeと見当をつけたが、「コスブル」についてはその原語表記に見当がつかず、原典探しに苦心した。

つぎに『家政要旨 前編』の原典解明の際に決め手

となった『版權書目』に『家政要旨 後編』の原典名が記述されていないかについて確認したが、その原典に関する記述はみられなかった<sup>16)</sup>。

平成9（1997）年4月初頭、筆者は『家政要旨』の出版者内藤伝右衛門に関する調査のために、山梨県立図書館を訪れた。山梨県立図書館甲州文庫には、内藤伝右衛門と『家政要旨』に関する貴重な資料が所蔵されていた。そのなかに「版權免許証」および「版權願書」がある。とりわけ『家政要旨 後編』の原典解明の重要な資料となったのが、次に記す「版權願書」である。この「版權願書」は、『家政要旨 後編』の小本を出版するにあたって、内務卿伊藤博文宛に提出されたものである。

#### 「出版々権御願

永峯秀樹抄訳 経済小学 家政要旨 後篇

仮名附 日本綴小本 二冊

明治十三年四月出版

右者永峯秀樹抄訳西洋千八百七十五年米国ニューヨーク府出版アントルーコム氏著ゼ、メーージメントヲフインファンシー、ト題シ小児心身ノ事ニ関シ父母ノ心得ベキ事ヲ説タル書及ヒ西洋ノ千八百七十六年英国ロンドン府出版トマスフル氏著ヒンツ、マーザース、ト題シ、父母ノ心得ヲ説タル書ヲ抄訳シ傍ラ自家ノ説ヲ附シ書ヲ婚姻妊娠及ヒ小児教育ニ付諸心得ヲ簡易ニ説明シ婦女子ニモ解シ易キ為メ傍訓ヲ施シ前編明治十年二月二日版權御免許ニ相成候モノニシテ一切条例ニ背キ候義無之候間今度所談上出版致度猶版權免許奉願也

明治十三年二月五日

抄訳人 静岡県士族 永峯秀樹

東京府下麹町区有楽町二丁目貳番地

出版人 山梨県平民 内藤伝右衛門 印

西山梨郡甲府常盤町四番地

内務卿 伊藤博文殿」

（原文縦書）

##### 2) 原典解明および入手資料

「版權願書」の記述により、『家政要旨 後編』の原典は、「1875年アメリカニューヨークで刊行された、アンドリュー・コム（Andrew Combe）のザ・マネジメント・オブ・インファンシー（The Management of Infancy）」そして「1876年イギリスロンドンで刊行されたトマス・ブル（Thomas Bull）のヒンツ・マーザース（Hints Mothers）」であることがわかった。

本研究において初めて、これまで『家政要旨 後編』の原典の一つの原著者名として知られてきた「コスブル」が、実はトマス・ブルの誤りであったことが解明された。たしかに「版權願書」の原著者名をカタカナで筆書している部分においても、コスフルと読めくはない表記である。『家政要旨 後編』「序」に原著者

名がこのような誤記された理由として、翻訳者永峯秀樹が原著者名を読み間違えたとは考えにくいので、永峯が記した原著者名の記載にしたがって版木を作製した際、原著者名を読み誤ったものと推測する。

上記の記述に基づき、原書の調査を行った結果、次の原書資料を入手することができた。

(A) Andrew Combe, M. D.: *The Management of Infancy*, D. Appleton and Co., New York, revised and edited by Sir James Clark, Bart., K. C. B., M. D., F. R. S. (1871), 内閣文庫所蔵

(B) Thomas Bull, M. D.: *Hints to Mothers*, Longmans, Green, and Co., London (1875), 国立国会図書館所蔵

### 3) アンドリュー・コム『子女教養論』(Andrew Combe “*The Management of Infancy*”)の体裁

今回入手できた原書資料の体裁について紹介する。

『家政要旨 後編』の原典の一つ、アンドリュー・コムの『子女教養論』の原書資料として入手できたのは、1871年にアメリカニューヨークでD.アップルトン社により刊行された版(内閣文庫所蔵)である。クロス表装の表紙の背文字には“THE MANAGEMENT OF INFANCY BY ANDREW COMBE.”と記されている。

題扉には「THE MANAGEMENT OF INFANCY, PHYSIOLOGICAL AND MORAL. INTENDED CHIEFLY FOR THE USE OF PARENTS. BY ANDREW COMBE, M. D. REVISED AND EDITED BY SIR JAMES CLARK, BART., K. C. B., M. D., F. R. S., PHYSICIAN-IN-ORDINARY TO THE QUEEN. FIRST AMERICAN FROM THE TENTH LONDON EDITION. NEW YORK: D. APPLETON AND COMPANY, 549 & 551 BROADWAY. 1871.」と記されている。題扉上部に「太政官記録印」、左下に「太政官文庫」の朱印がみられる。

タイトルは、直訳すれば「子どもの管理法」とでも訳されるが、永峯秀樹は『子女教養論』と訳している。子どもの心身両面にわたる教育・養育に関する管理という意識である。INTENDED CHIEFLY FOR THE USE OF PARENTSとあることから、同書がおもに子どもをもつ親に活用されることを意図していることがわかる。著者名は、ANDREW COMBE, M. D. (医学博士)と記されている。後述するように、コムは1847年に50歳で亡くなっている。同書は、1871年と著者の死後25年後にロンドンで刊行された第10版をもとにアメリカ版初版として刊行されたものである。したがって、コムの原書は、もともとイギリス、ロンドンで

刊行されており、著者の死後に至っても版を重ねるほど、一般に広く読まれた書物であったことが理解できる。一方で、時代の変化にあわせた内容の改訂は必要であり、女王陛下の侍医、医学博士のサー・ジェームス・クラークによる改訂・編集が行われた版が今回の入手資料である。

このように『家政要旨 後編』の原典の一つ、『子女教養論』の原著者は、同書の序の記載にある「米人」ではなく、イギリス人医師によって刊行された本であったことが解明された。「米人コム」と記されたのは、永峯が使用した原書がアメリカで刊行された版であったため、こうした混乱が生じたものと推測する。

冒頭には、編者クラークによる「女王陛下への献辞」1ページ、「編者による緒言」12ページ、「著者コムによるクラークへの献辞」2ページ、「著者による緒言」4ページ、目次8ページがあり、本文297ページ、索引5ページとなっている。

目次によると、コム『子女教養論』は、16章で構成されている。その内容は、両親の体質が子どもの健康に及ぼす影響に始まり、妊娠期の母親の影響、乳児死亡の原因、乳幼児期の子どもの世話、教育のあり方などについて記された本である。

### 4) トーマス・ブル『母親の心得』(Thomas Bull “*Hints to Mothers*”)の体裁

『家政要旨 後編』のもう一つの原典であるトーマス・ブル『母親の心得』の体裁は、表紙は四六判、茶色のクロス表装で、扉には“HINTS TO MOTHERS”とのみ記されている。題扉には「HINTS TO MOTHERS FOR THE MANAGEMENT OF HEALTH DURING THE PERIOD OF PREGNANCY AND IN THE LYING-IN ROOM WITH AN EXPOSURE OF POPULAR ERRORS IN CONNECTION WITH THOSE SUBJECTS AND HINTS UPON NURSING. BY THOMAS BULL, M. D. Member of the Royal College of Physicians; formerly Physician-Accoucheur to the Finsbury Midwifery Institution, and Lecturer on Midwifery and on the Diseases of Women and Children; Author of ‘Maternal Management of Children in Health and Disease’ TWENTY-FOURTH EDITION LONDON: LONGMANS, GREEN, AND CO. 1875.」とある。この入手資料は、1875年に、イギリス、ロンドンにおいて、ロングマン、グリーン社より刊行された版である。「健康管理のための母親の心得、妊娠期と産褥期における一般的誤りを明らかにするとともに授乳の際の心得を記す」とある。原著者Thomas Bull, M. D.はロイ

ヤル医科大学のメンバー、産科協会の正会員、産科、婦人科、小児科の講師で、「子どもの健康と病気に関する母親の管理」の著者でもある。題扉上部には「教育博物館印」「明治十二年十月廿七日文部省交付」の朱印がみられる。『家政要旨 後編』の刊行は明治12(1879)年7月であるから、文部省交付の日付によると、今回の入手資料は、『家政要旨 後編』刊行より3か月ほどあとに交付されていることになる。

初版本への序2ページ、第7版への註1ページ、目次6ページ、本文381ページ、索引12ページである。

目次によると、ブル『母親の心得』は11章で構成され、その内容は、妊娠期の健康管理に始まり、妊娠の決定方法、妊娠に伴う病気の予防、出産の失敗の防止、出産予定日の決め方、陣痛前後・産褥期の母親の心得、乳幼児の世話と健康管理、種痘などに関するものである。著者が産婦人科の医者であることから、同書は妊娠から出産、子どもの養育に至るまでの医学的知識をふまえた内容になっている。前述コム『子女教養論』の内容との共通性が指摘できる。

## (2) 『家政要旨 後編』の原典研究

### 1) コム『子女教養論』の刊行趣旨および特色

コム『子女教養論』冒頭の編者および原著者の緒言に基づき、同書の刊行趣旨および特色について記す。

コム『子女教養論』は、一般の親を読者対象とし、あわせてコムの同業者である若い医者の入門書として執筆されたものである。

コム『子女教養論』の編者クラークの序文に述べられた刊行趣旨および本書の特色として、①コムとの交友関係から編者が同書の編集・改訂を行うに至ったこと、②時代の変化により現状にあわなくなっている箇所を削除したとする編集・改訂の方針、③乳幼児の死亡を防止するための知識を両親（とくに母親）に伝授しようとするコムの発刊の意図、④コムの記述がわかりやすく、親ばかりでなく、若い医者や学校の教師、家庭教師にも、生理学・衛生学の知識を習得する必要があることが述べられている。

『子女教養論』刊行の背景には乳幼児死亡率の高さがある。同書巻末には、編者クラークがロンドン記録局の報告書から採用した、乳幼児死亡の原因と範囲に関する情報が掲載されている<sup>17)</sup>。コムはこうした乳幼児死亡率を改善するための手だてとして、家庭において、その母親に予防手段としての生理学的知識を提供することを考えた。したがって、その内容は、同じ医者を対象として執筆される場合よりも、わかりやすく、

専門的知識を最小限に抑え、いささか教訓的に記述される必要があった。

またコム、クラークともに、生理学的知識が、医者や子どもを持つ親ばかりでなく、家庭教師などの子どもの教育に携わる職業にある場合にも習得するべきであると述べている。家庭教師を養成するセミナー等で生理学を盛り込む必要があり、ロンドン大学で初めてカリキュラムに取り入れられたことが記されている。

このように、コム『子女教養論』の特色は、生理学を学校教育および家庭の福祉を実現するために家庭医学書、育児書として応用を試みている点にある。コムによる緒言の冒頭には、子どもに関する生理学的研究はすでに多くなされているが、そうした知識を両親に提供しようという試みは少なかったと述べられている<sup>18)</sup>。クラークは、コムは医学的法則の応用を説明する手腕においてきわめて優秀であると述べており、そうした特色が、同書がイギリスのみならず、アメリカにおいても普及した理由であると考えられる。

クラークの緒言には、生理学に関する知識はとくに女子教育の本質的な部分を形成されなければならないと、繰り返し記されている。こうした観点は、イギリスのみならず、アメリカの女子教育にも影響を及ぼした。生理学的知識を女子教育と家政教育の体系の中に盛り込んだのが、アメリカ家政学の先駆者と称されるビーチャーである。ビーチャーの家政書には、Dr. Combeの名前が頻繁に記されており<sup>19)\*1</sup>、『子女教養論』の著者 Andrew Combe のことと推定される。明治初期のわが国の翻訳家政書ばかりでなく、アメリカ家政学成立史にも重要な影響を及ぼした人物として、コムとその著作に注目できる。

ブル『母親の心得』が妊娠・出産期の母親の健康管理という視点から執筆されているのに対し、コムの『子女教養論』は、子どもが生まれる以前から、両親の遺伝的性質が子どもに及ぼす影響があること、妊娠期の母親の生活様式が子どもに影響を及ぼす点にも言及がなされている。子どもの発達過程に即し、子どもの精神構造や幼児期における道徳教育の重要性などについて、医学的見地をふまえながら、子どもの教育問

\*1 たとえば、ビーチャーの『家政論』<sup>19)</sup>のうち、Dr. Combeの名前が記されているのは次の箇所である：p. 83, p. 89, p. 91, p. 112, p. 208, p. 215, p. 217, p. 221, p. 222, p. 236, p. 239. なお、同書 p. 210には、コム『子女教養論』の改訂・編集を行った Dr. Clark の名前も記されている。

題にまで踏み込んでいる点も、同書の特色である。

## 2) 原著者アンドリュー・コムについて

『子女教養論』の原著者アンドリュー・コムの略歴を次に記す<sup>20)</sup>。

アンドリュー・コム (Andrew Combe, M.D., 1797-1847) は、医学博士、生理学者、フレノロジスト。1797年10月27日にエディンバラで生まれた。彼の家庭は厳格なカルビン主義であった。エディンバラの高校と大学で学んだ後、兄ジョージ・コムと共同生活をしながら1812年に外科医の門下生となり、1817年、外科医の免許状を得た。同年、医学研究のためパリに留学。解剖学研究の傍ら、1818～1819年にはスプルツハイムのもとで脳の研究を行った。1819年、エディンバラに戻ったが、肺病に冒され、以後死ぬまでこの病との闘病生活が続く。1823年、エディンバラで開業。新しく設立されたフレノロジー学会に論文を寄稿し、「脳の傷が精神に及ぼす影響について」は、1823年活字になった。1823年、『フレノロジー学会誌』が設立されると加入し、死の前年まで貢献し続けた。1825年、医学博士の学位を取得した。彼の実践は、患者の治療を行う上できわめて重要であった。彼は奇跡を信じず、説明と予見によって多くの害悪を防いだ。1827年、フレノロジー学会の会長に選ばれた。

1831年、「精神錯乱に関する観察」を発表。1836年、クラークの推薦により、ベルギー王レオポルド付き侍医の約束を受け、ブリュッセルに移ったが、またもや健康を損ない、同年エディンバラに戻った。1838年、スコットランドでは異例の女王付侍医の任命を受けた。

彼の後半生は肺病に苦しみ、1847年9月17日、エディンバラ近くのコジーの甥のもとで死亡。死の直前に書いた船熱に関するコムの長い手紙は、1847年の9月17日の『タイム』誌に掲載され、1848年3月の『公衆衛生誌』第5号に再掲された。その示唆は、のちに移民船の所有者に強制執行された。

コムの相貌は、身長6フィート2インチで痩身であった。鋭く輝く目と熱意あふれる表情が印象的であった。節度があり、慈悲深く、独立心が強く公正であったが、とくに子どもたちとの談笑を好み、迅速で鋭い判断力の持ち主であった。

なお、改訂・編集を行った、サー・ジェームス・クラークは、準男爵、バス上級勲爵士、医学博士、ロイヤル・ソサエティ会員などの肩書きを持ち、女王陛下とアルバート王子付き侍医である。

## 3) アンドリュー・コムの著作について

すでに述べたように、コムの著作は、イギリスのみならず、アメリカ家政学の先駆者と称されるピーチャーにも影響を及ぼしている。コムには数多くの著作がある<sup>21)22)</sup>。そのうち代表的なものは、1834年に刊行された『健康と教育に応用される生理学』で、ただちに好評を博し、第12版の4回目の印刷が1843年に行われ、彼の死までにイギリスで28,000部のコピーが、アメリカでは数多くの版が売られた。1836年刊行『消化の生理学』は1849年には第9版が出た。1840年、彼は最後のそして最高の本とされる『生理学的道徳的子どもの教育論』を出版し、1847年には第6版が出た。同書をもとに、クラークが改訂・編集を行い、1860年に出版したのが『家政要旨 後編』の原典となった『子女教養論』である。同書は1871年にはアメリカ版が出版された。今回の入手資料がこれにあたる。

このように彼の著作が人気を博したのは、内容のわかりやすさ、実用性、良識ある書き方によるものである。彼の著作のほとんどは、実地に基づき、医学的診察による応答から抽出されたものであり、観察下にある実際の症状に関連するものであると彼は記している。彼はよく、自分自身は多芸多才ではなく、著作活動は彼には大変な労力であったと述べている。しかし彼は、健康に関する知識と実践の両方を向上させようとする誠実な熱意と、自然法則は神から授けられた機知の表明でありすべての人類によって研究されなければならないという強い信念によって執筆を行う活力を得た<sup>20)</sup>。

## 4) ブル『母親の心得』の刊行趣旨および特色

ブル『母親の心得』冒頭の序文によると、ブルが『母親の心得』を執筆した意図は、女性に対して妊娠・出産に関する知識を提供することにある。女性は妊娠時、医者に診せるべきであるのに、恥ずかしさからそれがためらわれる。そのような時、素人から間違ったアドバイスを受けるよりも、本で正しい知識を得る方がより有効である、と述べている。本書刊行の動機は、ブルの産科協会における活動から得られたものである。産婦人科の医者としての実地経験の中で生じた女性が妊娠や出産に関する科学的で正しい知識を持つ必要性の自覚が本書刊行に結びついている。

とくにブル『母親の心得』は、母親のための生理学という観点に立った執筆である。

ブルの著作のうち『母親の心得』は、1837年の初版刊行以来40年近くにわたって版を重ねている<sup>23)</sup>。第24版にあたる今回の入手資料は、最終版に近かつ

たと思われる。同書は1876年にロバート・パーカー (Robert W. Parker) による改訂版が出されている。『家政要旨 後編』の原典となった1876年版の『母親の心得』が、このパーカーによる改訂版(未入手)であったのか、ブルによるオリジナルの1876年版であったのかについては断定しがたい現状にある。British Libraryに所蔵されている1837年刊行の初版は、ページ数も92ページと少なく、章数も6章と少ない。『母親の心得』は初版刊行以来、幾度も内容の改訂が行われていることがわかる。

ブルには、この他に2冊の著作がある。そのうちの1冊が、前述『母親の心得』(原書)の内表紙に記されていた『子どもの健康と病気に関する母親の管理』で、1840年の初版刊行以来、20年以上版を重ねており、1877年には『母親の心得』同様、パーカーによる改訂版が出版されている。もう1冊の本は“The Sense Denied and Lost”で、B. G. Johnsによる編集版が1859年に刊行されている。

(3) 二つの原書と『家政要旨 後編』との比較検討つぎに、解明された2つの原書のどのような内容が『家政要旨 後編』に訳出されたのかについて把握するために、原書と訳書との比較検討を行う。

表1は『家政要旨 後編』の目次が、二つの原書のどの章に対応しているのかを示したものである。

すでに述べたように『家政要旨 後編』は子どもの保育に関する内容を中心としながらも、子どもに影響を及ぼす親の遺伝的影響、そうした観点から夫を選ぶこと(配偶者選択)に関する記述に特色がある。その章構成は、結婚、妊娠、出産、育児と女性のライフコースに沿った流れで編集されている。

こうした章構成のうち、冒頭部「身体ノ強弱ハ其父母ニ因ル事」「子ヲ欲スルノ情」「衣服」の遺伝に関する記述はコム『子女教養論』の第1章と第2章、「人ノ妻タル者ノ心得」から「産室中赤子ニ付テノ心得」までの妊娠・出産期の諸注意に関する記述がブル『母親の心得』の第1章・第2章、第4章～第7章、「小児ノ教育諸法」以降の子どもの教育方法を述べた部分がコム『子女教養論』の第13章以降の内容の一部に基づいていた。なお「夫ヲ撰ブ事」等『家政要旨 後編』の一部の内容については、今回入手した資料では該当箇所を見出すことができなかった。

永峯秀樹の訳文の特徴については、『家政要旨 前編』の訳文について別稿で述べた<sup>10)</sup>。『家政要旨 後編』の訳文にも原文の直訳ではない永峯特有の意識の

特徴がみられ、原文の要点をふまえながらきわめて簡潔に意識されているため、訳文の該当箇所を特定することが難しかった。すなわち『家政要旨 後編』は、配偶者選択から、結婚、妊娠、出産、子育てといった女性のライフコースに従って、翻訳者永峯秀樹が2冊の原書の内容をふまえながらも、内容・訳出箇所を選択・配列しながらまとめたものである。その翻訳方法は、原典に忠実であるというよりも、原書に記載された内容を裏付けに、永峯秀樹が独自にその内容を編集し直したと考えることができる。その翻訳方法により「永峯秀樹纂訳」と記されていることが理解できる。

ここで永峯の翻訳の観点と原書の特色との関連について考察する。ブル『母親の心得』の妊娠・出産に関する知識を女性に提供するために執筆された原著者の執筆の意図は、ほぼ『家政要旨 後編』に受容されたとみることができる。ブル『母親の心得』のうち『家政要旨 後編』に訳出されなかった内容は、出産後の乳房の管理、哺乳、子どもの世話、種痘に関する内容などで、原書の改訂が行われるなかで比較的新しく書き加えられている部分である。

一方コム『子女教養論』については、同書の特色である遺伝や育児の内容は『家政要旨 後編』に受容されているが、乳幼児の死亡率を改善するためのさまざまな方法が記された部分は、訳出されていない。こうした訳出内容選択に影響を及ぼしたのが、結婚前の段階から子どもの教育期に至る女性のライフコースに沿った『家政要旨 後編』の編纂方針にあったと考える。

#### (4) 原書の受容過程をめぐって

永峯秀樹が、2冊の原書を纂訳という形で翻訳刊行を行ったのは、妊娠・出産期の母親の健康管理と、子どもの健康管理および教育という内容を併せ持つ家政書の編纂を意図したためと考えられる。それはまた、イギリスにおいて、コムおよびブルが原書を発刊した意図に通じる。

原書のわが国における受容過程を考察するにあたって、ブル『母親の心得』(原書)が『家政要旨 後編』が翻訳刊行されたのとはほぼ同じ時期にあたる明治14(1881)年に、大井鎌吉訳『母親の教』として丸善から全訳刊行されていたことがわかった。東京家政学院大学附属図書館所蔵本は、四六判、表紙は茶色のクロス表装で、背文字には、「母親の教 文部省」と記されている。しかし、同書奥付には、「文部省」の文字は記載されていない。同一原書をもとに、2種類の翻訳書が刊行されていたという事実は、原書がわが国に及

表 1.『経済小学 家政要旨 後編』とその原典との比較対照表

| Bull “ <i>Hints to Mothers</i> ” (1875)                                                  | 『経済小学 家政要旨 後編』                                                                                                                                                                       | Combe “ <i>The Management of Infancy</i> ” (1871)                                              |
|------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                                                                          | 序<br>総論<br>夫ヲ撰ブ事                                                                                                                                                                     |                                                                                                |
|                                                                                          | 身体ノ強弱ハ其父母ニ因ル事<br>両親 遺伝 近親ノ婚姻 結<br>婚年齢 受胎ノ時父母ノ体状<br>懐妊中母親ノ強固                                                                                                                          | 1. Influence of the Constitution of Parents<br>on the Health of Their Children                 |
|                                                                                          | 家務                                                                                                                                                                                   |                                                                                                |
|                                                                                          | 子ヲ欲スルノ情<br>衣服                                                                                                                                                                        | 2. Influence of the Mother's Mode of<br>Living during Pregnancy, on the Health<br>of the Child |
|                                                                                          | 美男子<br>美貌<br>人ト交ルトキノ心得                                                                                                                                                               |                                                                                                |
| 1. Of the Management of Health during Pregnancy, and of Popular Errors upon This Subject | 人ノ妻タル者ノ心得<br>子ヲ欲スルノ情 食物 食好<br>ミ 腸ヲ調フル事 労働 衣<br>服 相感 懐妊ヲ察知スル法                                                                                                                         |                                                                                                |
| 2. Of the Mode by which Pregnancy May Be Determined                                      |                                                                                                                                                                                      |                                                                                                |
| 3. Of the Diseases of Pregnancy, and Hints for Their Prevention and Relief               | 〈該当箇所なし〉                                                                                                                                                                             |                                                                                                |
| 4. Of the Prevention of Miscarriage                                                      | 半産<br>半産ヲ防グ諸法<br>懐妊中壮健ノ人ノ心得<br>半産ノ徴候既ニ現ズル時之ヲ<br>止ムル法                                                                                                                                 |                                                                                                |
| 5. Of Reckoning, of the Mode of Telling when Labour May Be Expected                      | 産日ノ予算                                                                                                                                                                                |                                                                                                |
| 6. Hints for the Lying-in Room, Referring to the Mother                                  | 分娩ノ心得<br>分娩前 分娩近ヅクノ徴候<br>看護 産室 臥褥 産時ノ衣<br>服 寒戦 嘔吐 体勢 食<br>在褥等ノ心得 産期ノ長短<br>分娩ノ結団 医師産婆未ダ来<br>ラザルニ分娩シタル時ノ心得<br>双子<br>分娩後産室ヲ出ルトキマデノ心<br>得<br>流下物 身体ノ清潔 乳房<br>来客 物ニ凭リテ坐スル事<br>腹帯 飲食及其他ノ心得 |                                                                                                |
| 7. Hints for the Lying-in Room, Referring to the Child                                   | 産室中赤子ニ付テノ心得<br>赤子ノ取扱方 初生児ノ体質                                                                                                                                                         |                                                                                                |



## 永峯秀樹纂訳『経済小学 家政要旨 後編』の原典解明

|                                                      |                                                                                |                                                                                                 |
|------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 8. Of the Breast                                     | 〈該当箇所なし〉                                                                       | 3. Great Mortality in Infancy Produced by Removable Causes, and Increased by Parental Ignorance |
| 9. Of Nursing                                        |                                                                                | 4. Infant Health not Accidental, but Dependent on Fixed Laws                                    |
| 10. Of the General Management of the Infant's Health |                                                                                | 5. On the Constitution of the Infant at Birth                                                   |
| 11. Of Vaccination                                   |                                                                                | 6. Management of the Infant Immediately after Birth                                             |
|                                                      |                                                                                | 7. Food of the Infant                                                                           |
|                                                      |                                                                                | 8. Cleanliness, Exercise, and Sleep, in Early Infancy                                           |
|                                                      |                                                                                | 9. Choice and Regimen of a Nurse                                                                |
|                                                      |                                                                                | 10. Artificial Nursing                                                                          |
|                                                      |                                                                                | 11. The Nursery, and Conditions Required in It                                                  |
|                                                      |                                                                                | 12. Management of the Infant during Teething                                                    |
|                                                      | 小児ノ教育諸法<br>外物ノ知覚 心力 道德上ノ教育<br>心智の進歩<br>父母ノ道 給養 教育<br>子女ノ道<br>子女ノ義務 子女ノ権利 服従ノ時限 | 13. Management of the Child from Weaning to the End of the Second Year                          |
|                                                      |                                                                                | 14. The Mental Constitution, and Principles of Training in Infancy                              |
|                                                      |                                                                                | 15. Moral Education in Infancy and Childhood                                                    |
|                                                      |                                                                                | 16. Further Remarks on the Moral Management of Infancy and Childhood                            |

ばした影響を考察するにあたって着目される。

ブル『母親の心得』（原書）の全訳である大井鎌吉訳『母親の教』と永峯秀樹纂訳『家政要旨 後編』を比較してみると、前者が妊娠・出産に関する生理学的内容を主体とし、原典に忠実な訳文で、503 ページに及ぶ。『家政要旨 後編』より詳細な内容である。一方、『家政要旨 後編』は、ブルの原書とコム（Combe）の原書の内容をあわせ翻訳されており、女性の立場に立った配偶者選択（夫の選び方）、子どもへの遺伝的影響に配慮すること、生まれた子どもへの教育方法などのより幅広い観点から女性のライフコースをカバーする翻訳家政書としての性格が備わったと考える。

#### 4. 要 約

『家政要旨 後編』の原典解明および原典と訳書との比較検討の結果、次の点が解明された。

『家政要旨 後編』の原典は、Andrew Combe: *The Management of Infancy*, D. Appleton and Co., New York (1875) および Thomas Bull: *Hints to Mothers*, Longmans, Green, and Co., London (1876) であった。なお本研究において入手できた原書資料は、それぞれ 1871 年版と 1875 年版である。

コム『子女教養論』は、読者対象として子どもを持

つ親ならびに若い医者入門書として執筆された。同書刊行の背景に、乳幼児死亡率の高さがある。コムは乳幼児死亡率を改善するための手だてとして、家庭において、その母親に予防手段としての生理学的知識を提供することによって、改善を図ろうと試みた。

コム『子女教養論』は、子どもが生まれる前から、両親の遺伝的性質が子どもに及ぼす影響、妊娠期の母親の生活様式が子どもに影響を及ぼすことに関する内容から始まって、以後、子どもの発達過程に沿って医学的見地に立つ内容が記述されている点に特色がある。とくに、子どもの精神構造や幼児期における道徳教育の重要性など、子どもの教育問題にまで踏み込んだ内容になっている。

一方『家政要旨 後編』のもう一つの原典であるブル『母親の心得』の刊行の意図は、女性に対して妊娠・出産に関する知識を提供することにある。

このように、永峯秀樹纂訳『家政要旨 後編』の二つの原典は、いずれもイギリスの医師によって執筆されたものであった。19 世紀は、医学がめざましい進歩を遂げた時代であった。この 2 冊の著作の特色は、そうした発達した医学の成果を家庭生活へと応用を試みている点にある。生理学・衛生学の知識を家庭生活に応用しようとする試みは、19 世紀の家政書に影響

を及ぼしている。とくに、アメリカ家政学の先駆者と称されるビーチャーの代表的家政書には、コムの影響を受けて、生理学・衛生学の科学的知識が導入されている。このような観点に基づく医学的内容を基礎とする翻訳育児書は、明治初期に『家政要旨 後編』以外にもわが国で刊行されている。『家政要旨 後編』の二つの原書の一つブル『母親の心得』（原書）は、大井鎌吉訳『母親の教』として明治14（1881）年に丸善から全訳刊行されている。イギリスで刊行された家庭医学書が、アメリカの家政書のみならず、わが国においても翻訳書によって紹介されていた点には着目される。今後、こうしてわが国に紹介された家庭医学書的内容を持つ育児書が、わが国の家政学・家政教育の発達過程のなかで、どのような役割を果たしていくのかについて、アメリカ家政学の発達過程との比較などを通して、研究を深めていく必要がある。

本研究を進めるにあたり、山梨県立図書館、東京家政学院大学附属図書館、国立国会図書館、内閣文庫、東書文庫、British Libraryにおいて、資料閲覧の便宜を図っていただいた。また、資料の解説に際しては、熊本県企画開発部文化企画課の右山幸介先生にご指導いただいた。また、東京家政学院大学名誉教授亀高京子先生には、貴重な示唆をいただくとともに温かいご指導を賜った。この場をお借りして、深謝申し上げます。また本研究は、平成10年度文部省科学研究費補助金奨励研究（A）の助成を受けたものである。

### 引用文献

- 1) 常見育男：『家政学成立史』，光生館，東京，15（1971）
- 2) 亀高京子，三東純子，熊田知恵，板谷麗子：家政書からみた明治初期の家政（学）について，東京家政学院大紀要，**18**，1-53（1978）
- 3) 二宮喜美恵，武井洋子：アメリカ翻訳家事科教科書のわが国家事科教科書への影響，東京学芸大紀要，第6部門，**31**，89-109（1979）
- 4) 常見育男：最初の家政学書「家事要法」と著者「カザリン・ビーチャー」と訳者「海老名晋」に関連して，家政学・家政科の背後にある歴史性調査の小論文集，常盤学園，群馬（1984）
- 5) 常見育男：最初の家政学書・海老名晋訳『家事要法』の訳者海老名晋と訳書『家事要法』（明治14年文部省刊）ならびに，原著者「カザリン・ビーチャー」Catherine Beecher と原典「プリンシプル・オブ・ドメスティック・サイエンス」Principles of Domestic Science についての調査，常見育男，群馬，1-63（1988）
- 6) 石川寛子：『Principles of Domestic Science』と『家事要法』，原論報，**18**，20-24（1984）
- 7) 亀高京子，犬尾智穂子：『家内心得草』と MRS. BEETON'S 『THE BOOK OF HOUSEHOLD MANAGEMENT』，原論報，**20**，20-24（1986）
- 8) 谷口彩子：永田健助訳『百科全書 家事倭約訓』の原典研究（第1報），家政誌，**42**，103-110（1991）
- 9) 谷口彩子：永田健助訳『百科全書 家事倭約訓』の原典研究（第2報），家庭経営学論集，**1**，25-40（1991）
- 10) 谷口彩子・亀高京子：永峯秀樹抄訳『経済小学 家政要旨』とその原典との比較考察，家政誌，**47**，289-302（1996）
- 11) Taniguchi, A., and Kametaka, K.: Comparative Study of Mrs. E. F. Haskell's "*The Housekeeper's Encyclopedia*" and Beecher's Three Books on Domestic Economy, *Nihon Kasei Gakkaishi (J. Home Econ. Jpn.)*, **49**, 223-234（1998）
- 12) Taniguchi, A., and Kametaka, K.: Special Quality of Mrs. E. F. Haskell's "*The Housekeeper's Encyclopedia*" - Based on Shep's Notes in "*Civil War Cooking*" -, *Nihon Kasei Gakkaishi (J. Home Econ. Jpn.)*, **49**, 881-888（1998）
- 13) 谷口彩子：『経済小学 家政要旨』の刊行事情と内藤伝右衛門，家政誌，**50**，69-77（1999）
- 14) 田中ちた子，田中初夫（編）：『家政学文献集成 明治期Ⅱ』，解説，渡辺書店，東京，1-6（1966）
- 15) 田中ちた子・田中初夫（編）：『家政学文献集成 明治期Ⅲ』，解説，渡辺書店，東京，3-8（1966）
- 16) 内務省：版權書目，第7号，5，明治11年8月5日（朝倉治彦監修：『日本書籍分類総目録』，第1巻，日本図書センター，東京，219（1987）所収）
- 17) Combe, A.: *The Management of Infancy*, D. Appleton and Co., New York, 279-283（1871）
- 18) Combe, A.: *The Management of Infancy*, D. Appleton and Co., New York, 19（1871）
- 19) Beecher, C. E.: *A Treatise on Domestic Economy*, Marsh, Capen, Lyon, and Webb, Boston, 83, 89, 91, 112, 208, 215, 217, 221, 222, 236, 239（1841）
- 20) Stephen, L., and Lee, S.(ed.): *The Dictionary of National Biography* (founded by Smith, G.), Oxford University Press, London, Vol. IV, 881-882（1917）
- 21) American Library Association(ed.): *The National Union Catalogs Pre-1956 Imprints*, Vol. 117, Mansell, London, 150-153（1970）
- 22) British Library (ed.): *The British Library General Catalogue of Printed Books to 1975*, Vol. 67, Clive Bingley, London, 50-51（1980）
- 23) British Library (ed.): *The British Library General Catalogue of Printed Books to 1975*, Vol. 47, Clive Bingley, London, 150-151（1980）